

## 序章：運命の誘惑

私はデイビッド、飽くなき歴史の愛好家で、古代の遺物が囁く物語に傾倒する若きジャーナリストだ。好奇心と説明のつかない魅力に駆られ、私は都市の迷路のような通りに囲まれた骨董品店の前に立っている。ここは、時間の執拗な進行を逆らうような場所だ。

店に入ると、私を待っていたのは酔わせるような香りの混合物 - 古木、古びたページ、そして何とも言えない、何か神秘的なもの。薄暗い光は場所に幽玄な雰囲気を与え、遺物たちは呼びかけ、長い時代の物語を囁く。

カウンターの後ろには女性が立っている、彼女の銀色の髪は煌めく滝のように流れ落ち、尖った耳は彼女の美しさに幽玄な質を加えている。彼女の存在は謎だ - 彼女は骨董品店の店主というより、ファンタジーの物語から来た人物のようだ。

周囲を見て回る中、私の目は彼女の目と合い、磁力に引き寄せられる。彼女は私の方へ歩いてきて、その動きは謎めいた優雅さに満ちている。彼女が話すときの声は、メロディーのようで、柔らかく、しかし強い、

「何か特別なものをお探しですか？デイビッド」

自己紹介もなしに私の名前を知っていたことに驚きを隠せないでいると、彼女はこう続けた、

「ここには多くの物語が隠されていますが、特にあなたを待っていたものが一つあります。」

それから、彼女は古い革製の本を取り出す。「影の誘惑：サキュバスとの交わり」とタイトルが書かれている。彼女はそれを私の手に置き、その目は期待と奇妙な確信の混ざった輝きを放つ。

「この本に書かれた物語は単なる神話以上のものです、デイビッド」

彼女の声はほとんど囁きに近く、

「真実はこれから解き明かされるのを待っていて、秘密の持ち主を探している。この本があなたを選んだのです」

その瞬間、私は本とその持ち主に漂う謎めいた雰囲気に引き込まれずにはいられなかった。この本が、私の変身と情熱の道のり、そして本当の運命の道へと続く鍵になるとも知らずに。



# 第1章：禁忌を解き明かす

家に戻った私は、血管を駆け巡る奇妙な興奮を抑えられなかった。古代の本の魅力に抗うことができなかったのだ。その摩耗した革の表紙が私に呼びかけ、忘れ去られた知識と奥義の秘密を囁いているかのようだった。

そのページは、時間の無情な進行によって黄ばみ、暗号的なテキストと複雑なイラストで覆われていた。それらの中には、私が飛び込んで忘れ去られた伝承の世界に迷い込むかのような詳細なものもあった。その文章は私が以前に見たことのないもので、記号と文字の混合物だったが、驚くべきことに、私はそれを完全に理解していた。まるで本が直接私に話しかけ、私の魂が認識する言葉で秘密を共有しているかのようだった。

さらに深く探求すると、私の目はある一節に留まった。それは呪文で、その横には官能的で恐ろしい姿のサキュバスが描かれていた。彼女たちは、その超自然的な美しさと魔法の力で男性を誘惑すると言われている。

大胆で魅力的な文章で書かれた呪文は、それを唱える者に'究極の快感'を与えると約束していた。それは興奮を誘う主張で、私の中に好奇心の炎を燃やした。禁断の誘惑、私の想像を超えた体験の約束に抗うことは不可能だった。

気がつくやうに、私は準備に追われていた。本の詳細な指示に従って、複雑な魔法の円を再現し、シンボルと線を一つ一つ丁寧にコピーしていた。必要なアイテムを集めるにつれて、空気は予感に満ちて厚くなり、それぞれが不思議な感覚を増していった。

ついに、全てが整い、私は丁寧に描かれた円の中心に立つことになった。時計が真夜中を打つ、魔女の時間、この種の儀式には最適な時間である。私は呪文を唱え始めた。その言葉は外国語でありながら、私がそれを何千回も話してきたかのように、自然に私の口から滑り落ちた。

最後の音節が部屋に響くと、空気は電気を帯びた静寂で満たされた。私はそこに立ち、心臓がドキドキと鼓動し、何か、何でも良いから、何かが起こるのを待っていた。しかし、秒が過ぎても、神話の生き物や地を揺るがすような快樂の体験の兆しはなかった。

安堵と失望が入り混じったため息が漏れる。首を振り、私は今夜はもう休むことに決めた、まだ本当の変化が始まろうとしていることを知らずに。





## 第2章：不吉な始まり

奇妙な感覚、言いようのない不安感が私を襲う。周囲が曇気楼のようにわずかに変化し、一瞬歪んでから元に戻る。微妙だが、間違いのない感覚だ。鼓動が速くなり、何かがおかしいと内なる声がささやく。

この不穏な感覚についてさらに考える前に、私は内側から放射される息苦しい熱に襲われ、全身を包み込んだ。額に汗がにじみ、小滴となって流れ落ちる。シャツが肌に張り付き、閉塞感と不快感を覚える。

「何が...私に起こっている？」

私の感覚は鋭くなる。あらゆる音、あらゆる動きが鋭くなる。部屋の色はより鮮やかに、影はよりはっきりと見える。私の皮膚は、まるで生き返ったかのように敏感に反応する。

パニックが高まり、私は急いで本をめくり、呪文のページを探し、何かの答えを探し求めた。以前にはなかった一節に指が止まった。深い深紅で刻まれた文字が、不気味な光を放っている：

**"究極の快楽を求める、この呪文の読者へ。一度発動したら、後戻りはできない。この儀式は単に快楽を与えるだけでなく、夜の誘惑者の本質を導き、彼女のイメージにあなたの存在そのものを作り変えるのです"**

「そんな...ありえない」

私は眩いた。

「前に読んだ覚えはない」

背筋に冷たい戦慄が走る。

「私は何をしたんだ？」

何か深い重大なこと、取り返しのつかないことを引き起こしてしまったのだ。私は、この先に不吉に立ちはだかる未知の変化に対して身構えた。





### 第3章：魅惑の顔

部屋の中が不穏な静けさに 包まれ突然、ベルベットのよう女性らしいささやきが私の意識に入り込んできた、

「まずはあなたの顔を美しくしましょう」

あまりに親密で、しかも出所のはっきりしないその意外な声に、私は不安に震えた。私の思考は駆け巡り、説明を求める。どうしてこんな声が私の心の中で聞こえるのだろうか？氷のような恐怖が汗と混じり合い、こめかみを伝う。

この超現実的な瞬間は、柔らかい手が肌を撫で、彫刻しているような、私の顔を包む感覚によって、すぐに覆い隠された。以前は突出していた顎のラインが緩やかにカーブし、より控えめで屈強になった。私の頬骨は、まるで目に見えない彫刻家の親指で押されたかのように、微妙に盛り上がり、より洗練された貴族的な顔立ちになる。鼻筋は細くなり、薄かった唇は朝露を待つ花びらのようにふっくらとした。

見えない力に引き寄せられるように、私は近くの鏡に近づいた。鏡に映る私の姿は、魅惑的であり、異質でもある。かつては穏やかだった私の青い瞳は変貌し、今は燃えるような深紅の色に燃えている。形も変わり、わずかに細長くなり、より猫っぽく、より魅惑的に見える。彼らは夜の謎を約束し、その視線に触れる勇気のある者を引き寄せる。

「わ、私はどうなってしまったんだ？」

出てきた声は旋律的で女性的なものだった。まだ私の声だとわかるが、以前にはなかった魅力的な音色だ。

「こんなこと...ありえない」

ベルベットのよう私の声のトーンが、今私がまとっている顔の魅惑と呼応している。信じられないという波が私を襲い、鏡のように映し出された紛れもない証拠との整合性に苦悩する。

その謎めいた声は、今ではすっかり聞き覚えのある声になり、戯れのような軽快さと共に戻ってくる、

「あら、デビッド、これはほんの始まりに過ぎないわ...」







## 第4章：魅惑的な変身

ピリピリとした感覚が頭皮を包む。頭には以前にはなかった独特の重みがある。パニックが沸き起こり、何が待っているのかと身構える。

「今度は何だ？」

驚いたことに、私の髪は変化していた。ずっと黒かった髪の毛が、鮮やかな赤に覆われ、どんどん伸びていく。伝説や神話を思わせる燃えるような色だ。

「だめ、だめ、だめ」

私は不信感を含んだ声でつぶやいた。

「ありえない。これはただの悪夢だろ？」

しかし、現実は否定できない。私の髪が流れ落ち、溶岩のように揺らめくと、私は畏怖と恐怖の間で心が揺れ動く。手触りは柔らかく、絹のようで、私はその美しさに魅了され、指を通さずにはいられない。

この奇妙な姿を拒絶したいのは山々だが、その魅力に惹かれる自分もいる。輝く赤い髪が私の顔を縁取り、すでにはっきりとした変化を引き立てている。見慣れないが、その姿には紛れもない魅力がある。

重いため息をつきながら、私は細部まで観察した。

「デビッド、お前は何者になるんだ？」

怯えと驚きが入り混じった声で、私は自分自身にささやく。

頭の中の声が、いたずらっぽくつぶやく、

「デビッド、変身を受け入れなさい。変化するたびに、あなたの中に新しい魅力が開花するのだから」。



## 第5章：魅惑の呼び声

頭の両側から、鋭く脈打つような感覚が走る。私は本能的に手を伸ばしたが、固くて曲がった何かの始まりを感じた。私の指は、大きくなっていく突起をなぞり、最初に恐れていた角であることを確認した。

「いや...これは本物じゃないはずだ。角なんて。」

しかし、私がそれに触れると、内なる声が魅力的にささやく、

「新しい姿を受け入れなさい、デビッド。この角は力の象徴であり、魅力の象徴なのよ。君は怪物になるのではなく、人間性を超越するの」

私は耳を引っ張られるような、伸びるような感覚を覚える。恐る恐る触ってみると、耳が研ぎ澄まされ、エルフのような形になっている。私は、そのような存在が魅惑的な美しさ  
と力を持っていたファンタジーの物語を思い出す。しかし、これは物語ではなく、私の現実なのだ。

「自分を見てごらんなさい」

その声は、誘惑に満ちた口調で懇願する。

「あなたは伝説的な存在になりつつある。これこそ、あなたがいつも望んできたことではありませんか？特別で、強靱で、魅力的であることを。」

見過ごされ、影に隠れ、目立ちたい、何者かになりたいと切望していた頃の記憶が呼び覚まされる。その声は、私が深く埋もれさせた欲望を引き出しているようだ。

私は再び鏡を見つめ、先ほどの角、尖った耳、輝く髪を目に焼き付けた。最初の衝撃とは裏腹に、私は魅力の芽生えを否定できない。

「私は... 私は...サキュバスに変身する」

新しいメロディアスな声が、その言葉の真実を響かせる。恐怖は残っているが、今は好奇心をそそられる。

「受け入れることが鍵よ、デビッド」

その声が囁く。

「この変身は運命ではなく、あなたの願望なのです。受け入れて、魅惑に身を任せなさい」。





## 第6章：魅力を受け入れる

私の胸から深い温もりが放たれ始め、鼓動が高まるたびに脈打つ。かつては心地よく緩んでいた私のシャツは、今や膨張した肉に圧迫されている。呼吸が速くなり、浅い息が、深いため息に変わっていく。

呼吸をするたびに胸が高くなり、シャツの生地が膨らんだ胸に張り付く。そのひとつひとつが、私の中を駆け巡る圧倒的な感覚を物語っている。

「ああ...おお...この心地よい感覚は何だ？」

好奇心と言いきれぬ欲望に駆られた衝動に駆られ、私は急いでシャツのボタンを外した。生地が裂けると、より豊満になった胸が現れ、その肌は滑らかでゾクゾクする。乳房は敏感で、触れるたびに背筋がゾクゾクし、私は歓喜のあまり息をのむ。

鏡が手招きし、映し出されたその姿は異質でありながら、私を酔わせる。カーブ、柔らかさ、そしてこれからさらに魅力が増すという予感、そのすべてがそこにあり、私を見つめ返している。突然とはいえ、その変貌は正しく、力強く感じられる。

私は深く、震えるような呼吸をし、その変化を処理しようとした。

「んん...これがサキュバスの魅力なのか？」

私の声は、驚きとほのかな誘惑で部屋いっぱい響く。触られるたび、自分の体を愛撫されるたび、私は快感の渦に巻き込まれる。

「ああ...とても美しい...とても魅力的...」

感覚に溺れ、より深い憧れが浮かび上がる。ただ受け入れられたいだけでなく、それ以上の欲望。サキュバスの形の魅力、その力と誘惑が私を呼んでいる。

「もっと膨らんでくれたら.....」

その願いは純粹で本物だった。

耳元で、一層響く甘い声がささやく、

「ただ望むままにすれば良いの。そうすれば、願いはすべて叶うわ」







## 第7章：官能的な目覚め

以前は控えめだった胸のカーブが膨らみ始め、私の目の前で目に見えて膨らんでいく。

「ああ.....神様、これは.....想像以上だ」

私は畏敬の念と欲望が入り混じった声でささやく。柔らかなビロードのような肌触り、魅惑的な重さ、その感覚は私を溺れさせようとする。震える手が伸び、指がぬいぐるみのような暖かさに押しつけられると、息が止まりそうなほど深い快感が押し寄せてくる。

「この変身のひと時を存分に味わってください」

私の中の声が、まるで約束のようにささやく。

我慢できず、私の両手は、今際立っている乳首へと動いた。そっと指でひとつを挟み、ゆっくりと転がす。

「ハアッ...」

思わず唇から鋭い吐息が漏れるが、それは予期せぬ快感の高まりの証だ。私の行為はさらに熱を帯び、乳首をわずかに引っ張り、そしてねじり、その動きのたびにエクスタシーの衝撃が体を駆け巡る。

「ああ、そうだ...」

私は息を吐き、快感が高まっていく。

"それは...圧倒的だ"

私は本能的に身を乗り出し、片方の乳首を口に含んだ。その行為は、私をさらに恍惚の渦に巻き込む。

触れるたびに、感じるたびに、私は限界に近づいていく。

高まる快感は、ほとんど耐えがたいものになる。そして、最後の深い喘ぎとともに、私は手を放した。

「もう... イッちゃう！ あああああ！」

多幸福感が次々と押し寄せ、私は疲れ果て、至福の満足感に浸る。



## 第8章: 理想的な曲線美

強烈な快感の余韻がまだ私の感覚を曇らせているとき、再び魅惑的な口調の声が聞こえてきた。

「次は何をお望みですか、デビッド」

その問いかけに、私はさらけ出されたような、無防備な気持ちになる。肉体的な変化だけでなく、心の奥底に抱いていた欲望と向き合うことだ。美術品やメディアから、私が密かに憧れていた象徴である豊満な人物のイメージが脳裏をよぎる。

"私は...私はお尻をもっと膨らませたい、もっと...魅力的でありたい"

私は告白する。自分が求めているのは抽象的な形ではなく、無意識のうちに憧れていた魅力の表れなのだと。

温かさが腰のあたりに集中し始め、膨張感があり、新しい、未知の充実感がある。衣服が締め付けられ、異質なものに感じられる。私はためらいながらも、汗で濡れた服を脱ぎ、全裸で無防備に立つ。鏡は、私であり私でない姿を映し出す。私の目は、新しいお尻の丸みを帯びた曲線に引き寄せられる。慣れない柔らかさに指が沈み込む。無防備で生々しいうめき声が漏れる、

「これは... 私が知らなかった一面だ」

「デビッド、あなたの深い欲望を完全に受け入れる準備はできていますか？」

その声は、誘惑と挑戦が入り混じった言葉だ。変身するたびに、魅力的な世界へ一歩ずつ深く入っていく。しかし、最後の変身は？それは何を伴うのだろうか？

期待と不安と興奮のカクテルが私を満たす。強く飲み込んで、私は囁き返す、

「準備はできている」





## 第9章：変身の頂点

異質でありながら親しみのある温かさが、私の股間から広がり始め、私の思考、感覚、存在そのものを蝕んでいく。それは脈打ち、手招きし、無視できない魅惑的なダンスだ。脈打つたびに、波立つたびに、私は取り返しのつかない旅に出たことを思い知らされる。

しかし、喜びが増すと同時に、歯がゆい恐怖が襲ってくる。自分のアイデンティティの一部を、未知なる未来と引き換えにすることになるかもしれないという現実だ。心臓が高鳴り、手のひらに汗をかきながら、内なる戦いが続く。変身の魅力は否定できないが、潜在的な喪失感は計り知れない。

暖かさが容赦なく広がり続ける中、私は深い脆弱性の感覚にとらわれる。かつては誇りと男らしさの象徴であった私の男らしさが、いまや露わになり、繊細になり、激変の危機に瀕していると感じてしまう。

「やめて... お願いだから」

それは必死な願いだった。しかし、それは休息を求める嘆願なのだろうか？それとも、感覚をエスカレートさせたいという願望なのだろうか？

常に存在するその声は、慰めながらも脅かすような口調で、再び私を包み込む。

「あなたはこれを望んだ。あなたは新しい形、新しい感覚を求めた。思い出してちょうだい、もう後戻りはできないのよ」

私は震えるような呼吸をし、自分の選択の重さに押しつぶされそうになった。「これが私が本当に望んでいたことなのか？

私はほとんど独り言のようにつぶやいた。

その声は今、まるで嘲笑うかのように柔らかく、ささやく、

「あなたはこの禁断の儀式を試した。もっと欲しいと思わないの？それとも、快樂の虜になってしまうことを恐れているのかしら？」

感情と感覚の渦に巻き込まれ、私は引き裂かれそうだ。引きこもりたい、慣れ親しんだものにしがみつきたいという気持ちもある。しかし、もうひとつの、より原始的な部分は、この先にある未知の世界に興味をそそられ、興奮さえしている。恐れるとともに予期していた私の変身のクライマックスが近づいているのだ。







## 第10章：押し寄せる津波

部屋の雰囲気が変わり、期待感でいっぱいになる。私の股間の圧力が高まるにつれて、空気そのものが電荷を帯びて脈打つようになる。

最初は穏やかな震えで、間近に迫った嵐の予兆だ。「うーん... 私の息は止まり、その感覚は意識の端でたゆたう。別世界のような、幽玄の境地に達するほどの深い興奮を感じる。

突然、心の中で魅惑的な声が囁いた、

「出しなさい、デビッド。この快楽に身をゆだね、世界にあなたの悦びを見せつけなさい」

その後押しによって、ついに水門が開いた。

「ああああああ！」

私の声は共鳴し、原始的で、生の、抑制のきかない快楽で満たされる。放出は激しく、濃厚で熱い液体が勢いよく噴射され、私の心を揺さぶる。それはまるで噴水のように、天井に向かって伸びていく。

重力が作用すると、温かい滝のような液体が私の皮膚に飛び散り、胸、腕、顔にねっとりとした温もりの小滴を残す。その熱気、絹のような肌触り、溢れんばかりの温もり。

波が押し寄せるたびに、部屋そのものが変化する。床はぬるぬるし、私の足元にはきらめくプールができる。壁には私の恍惚の証が刻まれ、薄暗い雰囲気の中で輝いている。

それでもリズムは衰えない。もうひとつの波が、先ほどの波よりもさらに強烈に迫っている。

「あああ！！！！またイク！！！」

それは叫びであり、手招きであり、感覚の奔流への屈服である。一回一回の放出が前よりも大きく、勢いがあり、歓喜に満ちている。

私の精神は快楽に浸され、刹那的な思考は放出のリズミカルな脈動に覆い隠されると共に、温かい飛沫が私の体にかかり、興奮の香りが空間を酔わせる。



## 第11章：避けられない変身

快感の洪水が衰え始めると、新しい感覚が現れた。デビッドは股間から引きつるような、縮むような感覚を覚えた。痙攣のような放出があるたびに、彼の股間は後退し、サイズが小さくなり、彼はパニックに陥った。強烈な快感の波が、今度は下腹部の不快感と交錯し、何か新しい物、異質な物の発生を告げていた。

「いやだ、いやだ、いやだ！」。

「もう十分快楽を味わった！お願いだ、やめてくれ！女になんかなりたくないんだよ！俺はサキュバスになんかなりたくなかった！お願い、もう...やめて！」

その声は、かつては魅惑的だったが、今は冷ややかな語気で響いている。

「何回言ったらわかるの？この儀式は元に戻せない。あなたのかつての姿は、すぐに遠い記憶となるわ。今日が、女として、サキュバスとして、あなたの新しい存在の幕開けなのです」。

絶望がデビッドに染み込み、彼の嘆願は聞き入れられなかった。もう後戻りはできない。覚悟を決め、彼は最後の解放の始まりを感じた。そのエクスタシーは比類ないもので、全身が電撃的な快感に包まれた。

「ああああ！サキュバスになんかなりたくない!!!」

喜びと後悔が入り混じったデビッドの叫び声が響いた。しかし、その叫びが消え去るとともに、彼の男根も消え去り、新たな始まりの柔らかなひだに取って代わられた。

強烈な絶頂の余韻に浸りながら、デビッドのかつての男性の姿はもうなかった。彼女の太ももの間には、新しい女性としての繊細なひだがあり、それは彼女の変身の頂点だった。彼女は自らの精液で全身を輝かせながら、サキュバスへの変身に完全に圧倒され、疲れ果てたように深い眠りに落ちた。





